



TITLE:

京大広報 No. 604

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 604. 京大広報 2005, 604: 1981-2000

ISSUE DATE:

2005-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196491>

RIGHT:



京大広報

No. 604

2005. 9

目次

〈大学の動き〉

- 経営協議会学外委員の任命……………1982
- 「教員オフィスアワー検索システム」を公開……………1982
- 国際連合大学と大学間学術交流協定を締結……………1982
- 平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」の採択結果……………1983
- 文部科学省の新規事業「派遣型高度人材育成協同プラン」の採択結果……………1983
- JST「独創的シーズ展開事業の権利化試験」の採択結果……………1983
- 「京都大学オープンキャンパス2005」を開催……………1984

〈寸言〉

- 最近の大学教育……………村井康彦……………1985

〈随想〉

- 環境問題望見……………名誉教授 高橋旨象……………1986

〈洛書〉

- 長い話……………西田豊明……………1987

〈訃報〉

- …………………………1988

〈日誌〉

- …………………………1989

〈栄誉〉

- 橋本信夫医学研究科教授が世界脳神経外科学会のScoville賞を受賞……………1990
- 榎木義一名誉教授、荒木光彦工学研究科教授に国際自動制御連盟フェローの称号が授与される……………1990

〈話題〉

- 「環境安全保健機構開設記念フォーラム」を開催……………1992
- 医学部附属病院が全国で初めて「VRE(バイコマイシン耐性腸球菌)の疫学調査」を開始……………1992
- 宇治事業場安全衛生懇談会を開催……………1992
- 宇治地区教職員懇親会を開催……………1993
- 京都大学未来フォーラム(第16回)を開催……………1993
- 「2005 Daiwa International Workshop on Financial Engineering」を開催……………1994
- 医学部附属病院が接遇マナー研修会を実施……………1994
- 「第8回高校生のための化学化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会」を開催……………1994
- 「大学院生のための教育実践講座」を実施……………1995
- 再生医科学研究所が三重県立伊勢高等学校のSPP事業に協力……………1996

〈公開講座〉

- 法学研究科21世紀COEプログラム連続市民公開講座……………1996
- 農学研究科附属農場第9回公開講座……………1997

〈お知らせ〉

- 総合博物館平成17年秋季企画展……………1997
- 宇治キャンパス公開2005……………1998
- 第4回アトムサイエンスフェア……………2000
- 生態学研究センターオープンキャンパス……………2000

〈編集後記〉

- …………………………2000



「京都大学オープンキャンパス2005」を開催
 —関連記事 本文1984ページ—

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

経営協議会学外委員の任命

経営協議会学外委員

大星公二(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ・シニアアドバイザーが、経営協議会学外委員に7月19日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



「教員オフィスアワー検索システム」を公開

高等教育研究開発推進センターの「京都大学教育交流会プロジェクト」で企画を進めてきた「教員オフィスアワー検索システム」が完成し、8月1日(月)から下記URLで全学の学生向けに公開されることになった(利用にはKULASISのアカウントとパスワードが必要)。

<http://officehour.k.kyoto-u.ac.jp/>

オフィスアワーとは「学生が教員研究室を訪問し、勉学や進路等について相談できる時間帯」をいう。「研究テーマについて、それを専門としている先生に相談したいが、オフィスアワーの情報が探しづらい」「コンタクトが難しい」といった学生の声に応えるため、全学の教員にアンケート調査を実施し、「オフィスアワーを全学の学生に公開してよい」と回答した教員約400名の情報(研究室の場所、連絡先、オフィス

アワー時間帯、専攻分野など)をデータベース化した。教員名、担当学部・学科、キャンパス(吉田・宇治・桂・その他の別)に加え、教員の研究テーマに関するキーワードで検索できるようになっている。学生諸君の積極的な活用を期待するとともに、調査にご協力いただいた先生方に厚く御礼申し上げたい。

なお、このデータベースは今後も拡充・改善していく予定である。ご関心がおありの先生、新たに協力してよいとお考えの先生は、ぜひ下記までお問い合わせいただきたい。

京都大学教育交流会

オフィスアワー・ワーキンググループ

(担当教員 吉田 純)

wgl@pack.k.kyoto-u.ac.jp

◆京都大学教育交流会ホームページ

<http://pack.k.kyoto-u.ac.jp/>

国際連合大学と大学間学術交流協定を締結

本学は、国際連合大学と学際的研究、シンポジウム共催、共同プロジェクト等を通じて、両大学間の協力を強化、拡大するため、大学間学術交流協定を締結することに合意し、7月29日(金)、国際連合大学にて調印式が行われ、尾池和夫総長と国際連合大学ハンス・ファン・ヒンケル学長の署名により覚書が交換された。

国際連合大学は1975年に創設され、地球規模の諸問題の解決に研究と能力育成を通じて寄与することを使命とする学者・研究者の国際的共同体である。職員は220名。同大学のホームページは

<http://www.unu.edu/hq/japanese/index-j.htm>



覚書を交換し、握手をかわす尾池総長とヒンケル学長

平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代G P)」の採択結果

平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代G P)」に本学医学研究科の「新しい蘇生教育の広域展開」が採択された。現代G Pとは、文部科学省が高等教育の更なる活性化促進を目的として、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマを設定し、特に優れた教育プロジェクト(取組)に対して財政支援を行うプログラムである。

本学の取組は、近年の全国各地での自動体外式除細動器(AED)の配置、救急隊員に対する応急処置(病院前救護)におけるメディカルコントロール*の体制整備により、身近な応急手当、特に蘇生の世界でも、根拠に基づいた医療に基づく蘇生教育が求め

られるようになってきたことを受け、大学の知的財産と人的資源を生かして、質の高い心肺蘇生を行う心と技能を、広く社会に浸透させることをねらいとしている。

*メディカルコントロール【medical control】

救急救命士などが救急現場で実施する医療行為に関し、医師が指示または指導・助言および事後検証を行い、応急措置の質を担保する制度的枠組み。(三省堂提供「デイリー 新語辞典」より)
現代G Pについての文部科学省のホームページ
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/needs.htm

文部科学省の新規事業「派遣型高度人材育成協同プラン」の採択結果

平成17年度「派遣型高度人材育成協同プラン」に本学の「大学院地球環境学舎インターンシップ」プロジェクトが採択された。この「派遣型高度人材育成協同プラン」は、本年度から文部科学省が実施する新規事業で、これまでの主として就業体験や職業意識の形成を目的としたインターンシップとは峻別し、産学が人材育成・活用に関して協同して、企業等の現場を活用した「高度専門人材」を育成する、これまでにないコンセプトのインターンシップを構築するものである。

今回、採択されたのは、地球環境学舎環境マネジメント専攻が実践してきた特色あるカリキュラムで、

インターン研修を必修科目(10単位)とする環境マネジメントの実務者教育が評価され、それをさらに発展させて、同専攻の主として修士課程の学生を対象に、「大学教育による高度な知識」と「インターン研修経験による優れた問題解決能力」の両面を有して即戦力として社会に貢献できる実務者を研修先と協同して育成するプランである。

「派遣型高度人材育成協同プラン」についての文部科学省のホームページ
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/sangaku/index.htm

J S T 「独創的シーズ展開事業の権利化試験」の採択結果

医学部附属病院探索医療センターの赤水尚史助教授を研究リーダーとした、「グレリンを用いる新しい糖尿病治療薬の開発」が、科学技術振興機構(J S T)の「独創的シーズ展開事業の権利化試験」の平成17年度新規採択課題に選定された。この権利化試験は、大学・公的研究機関などで生まれた研究成果のうち、実用技術への展開が期待できる基本的特許が出願されているものについて、その特許に関する周辺特許などの知的財産権の権利化を図るものである。

探索医療センター・グレリン創薬プロジェクトは、膵臓β細胞におけるグレリンの新しい作用を最近見出した。本課題は、その研究成果を展開して、新たな作用機序を有する糖尿病治療薬の開発を目指す。

「独創的シーズ展開事業の権利化試験」についてのJSTのホームページ
http://www.jst.go.jp/giten/saiteki/pro_a/index.html

「京都大学オープンキャンパス2005」を開催

京都大学オープンキャンパスが「独創の花開く未来へ、ともに。」をテーマに、8月11日(木)、12日(金)の両日に、全国各地から高校生、保護者、引率者等を含め2日間で約7千人が参加し、開催された。

今年で4回目を迎えるオープンキャンパスは初日を総合人間学部、文学部、教育学部及び経済学部の4学部、2日目は法学部、理学部、医学部、薬学部、工学部および農学部の6学部に分けて実施した。

全体説明会は時計台記念館百周年記念ホールを会場として、両日とも500名の定員で行われた。オープンキャンパス小委員会山田洋子委員長の司会進行により、はじめに東山紘久副学長からオープンキャンパスの趣旨および目的についての説明があり、続いて尾池和夫総長から「京都大学を目指す諸君へ」と題して、京都大学の歩みと現状そして未来について語られた。

その後、京都大学応援団による力強い演舞と受験合格への熱いエールが送られ、参加者から盛大な拍手があった。



齋藤さん(上)と杉本さん

最後に在学生からのメッセージとして、初日は経済学部4年生齋藤孝さんと杉本俊介さんが、2日目は大学院工学研究科博士後期課程3回生の平尾泰一さんが、それぞれ自らの体験を熱く語り、全体説明会は閉会した。

一方、時計台記念館国際交流ホールでは、入試、学生生活・就職、留学及びキャンパスライフ等の相談コーナーが開設され、参加者や保護者からの相談や質問に担当職員が対応した。また、同ホールでは、参加者と在学生がお茶を飲みながら受験勉強や学生生活に関すること等、様々なことを語り合う在学生交流コーナーが併設され、両日とも大勢の参加者で



賑わう相談コーナー

賑わい、和やかな交流風景が見られた。

この他、百周年記念ホールでは、両日午後には生協から見た学生生活説明会が催され、参加者や保護者が熱心に説明に聞き入っていた。

施設見学が行われた附属図書館、総合博物館および時計台記念館歴史展示室の見学者は、それぞれ3千人を超える盛況ぶりで、今年度初めて公開された学術情報メディアセンター北館のスーパーコンピュータ見学も好評であった。

また、在学生のボランティアが大学構内を案内するキャンパスツアーも、多くの参加者の人気を呼んだ。



研究室訪問 工学部(上)と理学部

両日の午後からの学部説明会では、AとBの2回の時間帯を組み、学部長の歓迎の挨拶や模擬講義、施設見学、研究室訪問、相談コーナー等、それぞれの学部企画に見学者は熱心に参加し、関心の高さがうかがえた。

学部説明会終了後も、参加者はそれぞれ大学構内を自由に散策したり、時計台記念館前クスノキ周辺やカフェレストラン「カンフォーラ」で休息するなど、京都大学は両日にわたって賑わった。

寸言

最近の大学教育

村井 康彦



いまもあるのだろうか、大学の正門に入ってすぐ右手に木造の建物があって、その2階が美術部のボックスになっていた。入学して間もなくのこと、美術をしてみたいと思いその建物の段階を上がったまではよかったが、入口で見たものは、部屋の奥に横たわる大きな裸婦の絵であった。瞬間、足がすくんで進めなくなった。田舎者の私には刺激が強すぎて。結局、その場から引き返したのだった。あの時入部しておれば、もう少しはまじな感性や美意識の持ち主になったかも知れないのをと、この時のことを思い出すたびにちょっぴり後悔した。昭和24年のことである。

もっともその美術の世界に、半世紀をこえる歳月を経て昨年から関わるようになったのは、予期しなかったこととはいえ、多少運命的なものを感じないではない。長らく文化史の研究と教育に携わって来たことでもあり、最後のおつとめのつもりで岡崎の地に通っている。

それはともかく、この3月で大学の教師生活から完全に離れた。講義・講読・演習に会議や雑務etc.から解放されたことがこんなにも気分爽快になれるとは思ってもいなかった。教師の仕事は嫌いではなかったし、自分では結構頑張ってきたつもりであるが、これほどの解放感はどこから来るのか。たぶんそれは、最近の大学教育に魅力を感じなくなったせいに違いない。幸いこの欄に寄稿する機会を与えられたので、そのあたりのことを（“時代錯誤”との譏りを覚悟の上で）あえて書いておきたい。

最近の大学教師には教授技術の向上が求められている。学生の理解に資するために教材を十分用意しているか、それを授業時間内に有効に用いているか（使い残しはないか）、授業内容に応じた時間配分がなされているか（“余談”はしていないか）と

いったことから、板書は適切に行っているか、といったことまで。もっともこの中には学生側からの要求もふくめているが、これではまるで教育実習生並みである。

しかしこんなこと以上に気にくわないのが、近頃流行の「IT教育（授業）」なるものである。映像など各種視覚資料の利用が、先端機器の活用とともに奨励される。写真や図表の類はまだしも、しゃべればいい文章までもスクリーンに映し出す。当然のことながら授業は、スクリーン上の文字を読み上げるだけで終わってしまう。果たしてこれが講義というものだろうか。教室が暗くなるだけでなく、学生は前方のスクリーンを見続ける以外にはないから、その間手はお留守である。話を聞きながら、時折り内容を反芻するといった余裕もない。聞いている間は分かったような気分だが、感覚的な受容に終始しているから、あらためて論理的に再構成するのはむづかしい。学生たちが、使われたのと同じ資料を欲しがらるわけであり、教師もそれを承知で配布する。

資料といえば新学期に学生に配布する開講案内に必要なだからと、教師には早々と「シラバス」作りが求められる。来年度に行う講義の題目やその意図・趣旨はもとより、それをどういう順序で行うのか、毎時間のテーマと内容まで書くことになっている。科目によっては簡単に書き上げられるものもあるだろう。しかし、特殊講義などにはマニュアルはない。教師が目下行っている研究の成果をとり込みながら纏め上げる。授業の直前まで苦吟しながら筋道を立てて行くのである。それをどうして3ヶ月も4ヶ月も前に書き出すことができるというのか。一律のシラバス作りは教師に安易な対応を行わせ、大学教育の質的低下をもたらすだけのものと知るべきである。結果として学生のためになるとも思えない。

京都大学は例外だと思うが、大学教育の幼児化が（誰しも内心は分かっているながら）確実に進んでいる。一というのが“大学教師卒業生”の時代遅れでいささか八つ当たり気味の弁である。

（むらい やすひこ 京都市美術館館長、昭和28年文学部卒業）

随想

環境問題望見

名誉教授 高橋 旨象



停年退官のあと、関西大学工学部生物工学科の選択科目として、生物学概論Ⅰ・Ⅱの講義を担当している。科学史を通覧すると、生物学が科学として扱われるようになったのは物理学や化学よりはるかに遅れ、19世紀後半から20世紀初期にかけてである。しかし、現在の生物学は多様な生物種、分子から生物集団に及ぶ多くの階層レベル、さらには生物とそれを取り囲む環境との相互作用を研究対象とする、きわめて多様化した科学であり、さまざまな応用的分野を含めた重要な指導的科学に発展している。また、気候変動、環境破壊、感染症の蔓延、止むことのない国内・国際紛争などの政治・経済的諸問題は、生物学をはじめとする科学の知見を生かさなければ解決は困難であろう。J.ダイヤモンドが述べているように、今日も続く“北の繁栄と南の貧困”は、メソポタミアの肥沃三日月地帯でもっとも早く開始された農業生産とそれに伴う技術・社会の発展が、気候的な違いの少ない東西の大陸には伝播しやすく、赤道を横切らなければならない南北に伸びる大陸には困難であった運・不運から発しているからである（倉骨 彰訳「銃・病原菌・鉄」上下、草思社、2000）。

宇治構内の木材研究所（当時）に勤めるまで学生生活を送った農学部農林生物学科では、分子生物学とともに生態学が新興の領域として関心を惹いていた。ただ、対象（生物種のグループやその規模、現象、行動、生息域など）があまりにも多様で、対象を絞り込んでも相互作用の数が多すぎ、当時の大型コンピュータを駆使しても解析は困難であるように感じた。今日の生態学は、依然として膨大な範囲の内容を含めたままそれぞれの領域で発展しているが、「生態系」という専門用語は社会一般にも広く受け

入れられている。それは、いくつかの発見が、農林水産業をはじめとする経済的問題の解決に貢献したからであろう。また、人類が周囲の環境にもたらす負の影響が認識され、“環境”が大きな社会的関心となっているためでもある。しかし、スタンドからの観戦者であることを許してもらえらるなら、現在行われている「環境保護」運動には一方的な思い込みや商業的なエゴイズムを感じる。ケナフは地球を救えなかったし、ダイオキシンや環境ホルモンは社会に不安を煽りたてたが、ダイオキシンの人体摂取量は有機塩素系農薬の使用中止後年々減少の一途を辿り、環境ホルモンの作用はいずれも天然の女性ホルモンよりはるかに弱いものであった。「化石エネルギーの過剰消費による人為的地球温暖化」は今や地動説化し、反論が許されない雰囲気になっている。しかし、原因と結果の取り違い（ぬるくなると冷えたビールから炭酸ガスが出て行くように）ではないか、炭酸ガスの赤外線吸収帯は $12\mu\text{m}\sim 18\mu\text{m}$ の範囲に限られ、それ以外の波長帯の赤外放射は捉えることができないので、炭酸ガスの気中濃度がこれ以上高くなっても気温はあまり（もう？）上昇しないのではないかと、といった疑問は完全に否定されたのだろうか？クール・ビズやウオーム・ビズは、省エネルギーになるかもしれないが、“だから原子力発電”となると、ちょっと待ってと言いたくなる。そういえば、30年前の地球寒冷化説流行の時にも、石油資源はもうすぐ枯渇するので原子力発電というキャンペーンがあったことを思い出す。

人間は生活するだけで環境や生態系に大きな負荷を及ぼしてきた。その検証結果を現在に活用することの重要性は広く認識されつつあるが、科学的議論に耳を傾けず、危機意識に引きずられた対策だけをあせることは避けたいものである。

（たかはし むねぞう 元木質科学研究所教授
平成12年退官、専門は木材保存学）

洛書

長い話

西田 豊明



スピーチや文章は短かければ短いほうがよいと考える人が多い。会議において話題を提供するほうも議論するほうも自分の言いたいことをなるべくコンパクトにまとめて、定刻内にさっと終わり、次に移っていくのがスマートであり、いつまでもただだらと話を続けても、疲れるだけで、何の役にも立たないというのである。

一般にはそうであったとしても、創造や相互理解をめざすのであれば、話は別である。研究室のミーティングを例にとってみると、議論をはじめてしばらくの間は、月並みな意見や質問の応酬であり、これといって面白いことは起きない。しばらくたつと議論は同じようなところをぐるぐる回りはじめる。そろそろ潮時かと思う心を抑えて、何時間かぐるぐる回りを続けていると、そのうちにそれまで考えてもいなかった妙案が出てきたという経験を何度もしている。

以前、出席者十名弱のある会合の座長を務めたときの出来事である。そのとき取り上げていた話題はいかにも紛糾しそうな難問であった。事実、出席者の意見は割れて、到底まとまりそうにもなかった。そこで、2、3時間議論を続けて皆が黙り始めたときに、そろそろ意見も出尽くしたし、意見の一致を見そうにもないから、そろそろ投票をして決着をつけようと動議を出したところ、「いや、この問題はとても大事だから投票に持ち込まずに皆が合意するまでもっと話し合ったほうがよい」という長老の鶴の一声で否決され、会議は続けられることになった。その後、喧々諤々の議論は続いたが、やがて共通する考え方がみつきり、全員一致の結論にたどり着いたのである。随分な時間が費やされた会議であったが、そのかわりそれまでわからなかった他者の気持や考え方が次第にわかってきて、相互理解に達したと実感した。

多忙な現代社会では全ての会議を長くすることは現実的に不可能であるが、だからといって全ての会議を短く、効率的にするのは具合が悪いように思われる。それどころか、現代社会で長い会議、長い話、

長い文章の存在意義はきわめて大きいと思う。現代社会は、情報と知識の量が爆発的に増加している。その結果、人々は異なる情報・知識に依拠するようになり、考え方が多様化した。強い信念をもつことは大事であるが、自分が絶対正しいと信じている命題を世の中の「心ある人」も同様に信じているかといえ、それははなはだ怪しい。議論をするときは、参加者のそれぞれが自分の考えがどのような前提に依拠しているかをまず明示するところからはじめなければならない。

現代社会では、グローバル化によって、世界でただ一人自分だけがもつ個性が重要視されるようになっていく点にも注目したい。他の誰ももっていないものが個性である。みんなに共有されていることであれば、ちょっと話せばすぐわかる。皆と異なっていることは、その由来やら他との違いについて長々と説明しないとわかってもらえないだろう。長い文章で表してはじめて、主張の背後にある様々な前提や仮定、基本的なものの考え方や価値観、代替案、思考のプロセスの細部が自然に浮き彫りにでき、細部までよく理解してもらえるようになる。

長い文章、長い話、分厚い本によって考えを伝えようとするときのリスクは、途中で飽きられたり、嫌われたりすることである。そうなってしまうと、この話の奥には大きなものがありそうだというところまで気付いてもらったとしても、肝心の中身を伝えることはできない。

長い文章を読んでもらうためには、読者をひきつける魅力や読者を混乱させない論理性が不可欠である。そのような文章をどうしたら作れるかという問題は、小説家ばかりでなく、研究者にとっても難題であり続けてきた。たとえ、科学の話題であっても、事実や法則を並べるだけでは、納得してもらうことはできない。事実や法則が、喜び、驚き、悩み、苦しみを伴う受け手それぞれの心と結びついて、自分のこととして受け止められてはじめてわかってもらえるチャンスが生まれる。これは現在取り組んでいる会話情報学の主要な研究テーマの一つでもある。

(にしだ とよあき 大学院情報学研究科教授)

訃報

このたび、櫻井健郎^{さくらいたけ お}名誉教授、吉田^{よし だ}城^{じょう}文学研究科教授、吉川宗治^{よしかわそう じ}名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

櫻井 健郎 名誉教授



櫻井健郎先生は、3月14日逝去された。享年73。

先生は、昭和28年東京大学理学部物理学科を卒業、京都大学工学部助手、助教授を経て、同41年京都大学工学部教

授に就任され、航空工学科空気力学講座を担当された。平成7年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間長年にわたって、学生の教育と研究者の指導にあたられた。学外においては、日本物理学会、日本天文学会、国際天文学連合の会員として活躍され、また、多くの大学等で特別講義をされた。海外においても、大学や研究所の、客員研究員、客員教授、交換教授を歴任された。

先生は、回転成層流体の流れの研究においては、スピンドアウンの現象を始め、この分野の基礎的過程を明らかにし、高速回転する流れの研究では、遠心分離機中の流れ場を主な課題とされ、特に、スクープを持つ分離機内の流れの研究で、“櫻井の加法定理”として知られる著名な研究をされた。

また、長年研究された回天流体（培風館 物理学辞典）の分野では、太陽表面の差動回転の流体力学的研究や太陽風トルクによる太陽のスピンドアウン問題を初めて定式化するなど、天文学関係者からも高く評価された。

本学退官後は、亀甲船の研究をされ、これに関する論文の発表や、翻訳書の出版をされた。

（大学院工学研究科）

吉田 城 文学研究科教授



吉田 城先生は、6月24日逝去された。享年54。

先生は、昭和48年京都大学文学部を卒業、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了、同博士課程を単位取得退

学する間に、パリ第4大学第三段階博士課程を卒業し、同54年大阪大学言語文化部講師、京都大学教養部助教授、京都大学文学部助教授を経て、平成6年京都大学文学部教授、同8年京都大学大学院文学研究科教授に配置換えとなり、現在に至っていた。

先生は、フランス近現代の小説、中でも20世紀フランスを代表する最も重要な小説家の一人であるプルーストの研究において国際的に高く評価され、日本人としては初めて、ガリマール社の「プレイヤッド」叢書の『失われた時を求めて』全四巻中第一巻

の校訂者の一人として、テキストの校訂に携わった。主な著書に『『失われた時を求めて』草稿研究』（平成5年）、『対話と肖像 — プルースト青年期の手紙を読む』（同6年）、『神経症者のいる文学 — バルザックからプルーストまで』（同8年）、『テキストからイメージへ — 文学と芸術の間』（吉田 城編著、同14年）等がある。また頻繁にフランスでのシンポジウムに招かれて講演を行うのみならず、日本でもいくつかの国際シンポジウムを企画し、国際的な学術交流を積極的に推し進められ、学生の目を広く海外に向けるべくつとめられた。

これらの研究活動、学術上の貢献に対し、フランス政府から平成3年にパルム・アカデミック勲章（シュヴァリエ級）、同11年には同勲章（オフィシエ級）が授与された。

（大学院文学研究科）

吉川 宗治 名誉教授



吉川宗治先生は、7月22日逝去された。享年82。

先生は、昭和21年京都大学理学部を卒業、京都大学理学部副手を経て、同24年同学部助手、同32年同大学防災研究所助教授を経て、同37年同研究所教授に就任され、地震動部門を担当された。昭和63年に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和34年4月から2年間、インド国ルールキー大学客員教授に招へいされ、国際的な応用地球物理学の教育・研究の普及に努められるとともに、同48年から2年間京都大学防災研究所長および京都大学評議員を務められ、大学及び

研究所の管理運営に貢献された。また、学外においては昭和55年から1年間物理探査学会の会長を務められるとともに、国および地方の防災会議専門委員などを歴任され、安全・防災行政に指導的役割を果たしてこられた。

先生の専門は、応用地球物理学で、理学と工学の学際的立場から災害現象の解明とその対策のための新しい研究分野を開拓し、なかでも地震学の研究成果を地震工学研究に応用することにより、地震災害軽減のための応用地震学研究に関して多くの業績をあげ、黎明期の自然災害科学の発展に貢献してこられた。これら一連の研究教育活動、学会活動により平成13年4月、勲二等瑞宝章を受けられた。

(防災研究所)

日誌

2005.6.1～7.31

- | | |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 6月1日 環境・安全・衛生委員会 | 28日 企画委員会 |
| 〳 外国人留学生歓迎パーティ | 〳 教育研究評議会 |
| 2日 職員組合との団体交渉 | 〳 保健衛生委員会 |
| 6日 ドイツ, Gert Hoffmann ブラウンシュバイヒ | 29日 経営協議会 |
| 市長 他1名, 総長他と懇談 | 〳 役員会 |
| 7日 企画委員会 | 〳 核燃料物質管理委員会 |
| 9日 大学評価委員会 | 30日 職員組合との団体交渉 |
| 〳 人権に関する研修会 | 7月4日 役員会 |
| 〳 職員組合との団体交渉 | 5日 部局長会議 |
| 10日 学生部委員会 | 6日 全学共通教育システム委員会 |
| 〳 財務委員会 | 〳 コートジボワール, Christine Nebou Adjobi |
| 13日 役員会 | エイズ対策大臣 他2名, 総長他と懇談 |
| 14日 部局長会議 | 7日 動物実験委員会 |
| 〳 全学セキュリティ委員会 | 8日 学生部委員会 |
| 〳 職員組合との団体交渉 | 12日 役員会 |
| 15日 国際交流委員会 | 〳 企画委員会 |
| 16日 創立記念行事音楽会 | 13日 環境・安全・衛生委員会 |
| 〳 職員組合との団体交渉 | 15日 大学入試センター試験実施委員会 |
| 18日 創立記念日 | 19日 役員会 |
| 20日 役員会 | 〳 教育研究評議会 |
| 〳 名誉教授懇談会 | 20日 国際交流委員会 |
| 〳 永年勤続者表彰式 | 21日 企画委員会 |
| 21日 情報環境整備委員会 | 25日 役員会 |
| 22日 教職教育委員会 | 〳 組換えDNA実験安全委員会 |
| 24日 職員組合との団体交渉 | 28日 入学者選抜方法研究委員会 |
| 27日 役員会 | 29日 財務委員会 |

栄誉

橋本信夫医学研究科教授が世界脳神経外科学会のScoville賞を受賞

このたび、橋本信夫医学研究科教授が世界脳神経外科学会のScoville賞を受賞され、モロッコのマラケシュで開かれた第13回世界脳神経外科学会総会において6月18日（土）に授賞式が行われました。Scoville賞は、脳神経外科学領域におけるアートとサイエンスの発展に大きな貢献をした脳神経外科医を表彰するために、Dr. William B. Scovilleにちなんで1993年に創設されました。世界脳神経外科学会の副会長らによって推薦された候補者の中から、委員会での投票によって4年間に一人だけ選ばれます。

以下に同教授の略歴・業績等を紹介します。

橋本信夫教授は、昭和48年京都大学医学部医学科を卒業、同51年同大学院医学研究科博士課程に進学、同55年に医学博士の学位を授与された。昭和55年京都大学医学部助手、同62年同講師、平成5年国立循環器病センター特殊病棟（脳血管外科）部長を経て、同9年京都大学医学研究科教授となり、脳血管障害の外科、脳下垂体腫瘍の外科、脳腫瘍の外科を専門とし現在に至っている。平成17年4月より京都大学医学部附属病院副院長に就任し、法人化後の大学病院の整備にも尽力されている。学外では、日本脳神経外科学会専門医認定委員会委員長、日本脳神経外科学会理事、日本脳卒中学会理事、Treasurer of World Federation of Neurosurgical Societiesなどを歴任され、国内外で脳神経外科学の



発展と向上に大きく寄与されている。橋本教授の手術は、サイエンスに裏付けられた戦略とアートともいべき鮮やかな技術によって構成され、海外の脳神経外科医から“Master of Neurosurgery”と称賛されている。また、脳血管障害に対する臨床活動と、世界で初めて脳動脈瘤動物モデルの作成に成功しその後も動脈瘤発生のメカニズムに関する研究成果を発表してこられたことにより、昭和55年に日本脳卒中学会・日本心臓財団草野賞受賞、平成16年には公益信託美原脳血管障害研究振興基金美原賞を受賞された。今回のScoville賞受賞は、橋本教授の手術に対する姿勢、臨床・研究両面でのご活躍、さらには海外での脳神経外科医同士の友好関係構築に対する貢献が高く評価されたと同時に、さらなるご活躍を期待されているものと思われる。

（医学部附属病院）

榎木義一名誉教授、荒木光彦工学研究科教授に国際自動制御連盟フェローの称号が授与される

このたび、榎木義一名誉教授と荒木光彦工学研究科教授に、国際自動制御連盟(IFAC)からフェローの称号が授与されました。同連盟フェローは、自動制御分野において顕著な研究業績を有し、さらに同分野における国際貢献および教育への寄与が大なる者に与えられます。フェロー制度は、2004年の理事会で発足し、本年7月の第16回世界大会での授与が最初となりました。そのため、本年は全世界から31名のフェローが選出され、日本からは本学の2名が選ばれました。今後は、毎年約15名程度が選出される予定です。

以下に両氏の略歴・業績等を紹介します。

榎木義一名誉教授は、昭和14年京都帝国大学工学部機械工学科を卒業し、同25年京都大学工学部教授となり同55年京都大学を停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和41年より同47年まで京都大学原子エネルギー研究所(旧工学研究所)所長を務められた。同55年京都産業大学教授、同58年より同62年まで京都産業大学理学部長を務め、定年退官された。昭和55年社団法人システム総合研究所を設立し、理事長として、システム工学の理論と応用の研究開発にむけて産業界と学会をつなぐ役割を果たされた。平成16年をもって社団法人システム総合研究所を解散するとともに、NPOしなやかなシステム工学研究所を創設し“しなやかな”システムズアプローチの実用化に向けて努力されている。



国際的には多くの国際会議に我が国の代表として出席し、特に昭和53年より国際自動制御連盟会長に就任し、昭和56年国際自動制御連盟第8回会議の組織委員長を務められた。研究は一貫して、個々の対

象に捉われないで、その解析や総合においてすべての対象に共通して利用しうる所謂横断的方法論の開発であった。特に、実在系がその程度の差こそあれ、すべてが非線形の特性をそなえていることに着目し、幾多の困難を打破して、非線形系の解法を案出した。その扱った研究課題は、振動学、レオロジー、制御工学からシステム工学へと時代と共に変化した。この間一貫して非線形の問題に重点をおいた独特の発想にもとづく方法論の開発とその応用であった。そして最後に到達したシステム工学は、現下情報化社会の到来とともに、あらゆるシステムが複雑化し、大規模化することを考えるとき、この方法論なしでは、実在系の問題解決に対処しえなくなっていることは特に注目すべきである。特に複雑系を対象としたシステムズアプローチとして、日本独特の“しなやかな”システムズアプローチを提唱し、内外にその研究成果を発表し、注目を集めている。制御工学に関する研究と教育の功績に対して昭和55年4月に紫綬褒章を受章され、さらに長年の研究と教育における功績に対し、昭和63年4月に勲二等瑞宝章を受章された。

荒木光彦教授は、昭和41年京都大学工学部電子工学科を卒業、同46年工学博士の学位を取得、同年工学部助手に着任し、同講師、同助教授を経て、昭和61年同教授に就任された。平成12年～同15年京都大学高等教育教授システム開発センター長、同13年～同15年同評議員、同15年からは同大学院工学研究科長・工学部長を務められている。国際的にも、1994～98年IEEE Transactions on Automatic ControlのAssociate Editor、1999～2002年国際自動制御連盟理事などを歴任し、1999年からは国際自動制御連盟の機関誌Automatica制御システム応用部門のEditorを務められている。



荒木教授の主たる研究分野は、複合システム論、自動制御工学およびその産業・医療への応用である。同

教授は大学院生時代に、小さなシステムを組み合わせにより大きなシステムを構築していくための解析・設計理論の必要性を認識し、その理論を複合システム論と名づけられた。具体的には、M行列についてのリアプノフ型定理を証明し、それを基礎として複合システムの安定条件やwell-posedness条件を導かれた。

その後、自動制御工学へも研究範囲を広げ、世界に先駆けて多周期サンプル値制御系の理論および2自由度制御系の設計理論を展開された。また、応用面においても、2自由度PID調節計の提案、および同期発電機・鉄鋼システム・温調器・プラスチック押出成形器・サーボバルサーなどの制御の研究を行うとともに、医療への応用にも力を入れ、手術中の患者の血圧および麻酔深度の計算機制御システムを完成させて臨床応用に成功されている。

(大学院工学研究科)

話題

「環境安全保健機構開設記念フォーラム」を開催

安全週間の7月6日(水)に時計台記念館国際交流ホールで「環境安全保健機構開設記念フォーラム」が開催された。本学より尾池和夫総長、田中成明法務安全担当理事、大寫幸一郎環境安全保健機構長、また学外から高月 紘本学名誉教授、高橋政和京都市環境局地球環境政策部長、桂 一郎(株)ワコール執行役員社長室長が講演者・パネラーとして出席され、京都大学環境憲章の再確認と本学の環境への取り組みのキックオフとして、教職員学生等約180名の参加を得て行われた。

講演者として出席された高橋京都市環境局地球環境政策部長から京都市の環境に対する取り組みが発表され、京都大学についても身近な、できることから京都市と協力して環境問題に取り組んでほしい旨の講演があった。

また、パネラーとして出席された桂(株)ワコール執行役員社長室長から機構に組み込まれた各セン

ターの特色が生かされることによって今までにない環境安全保健に対する取り組みが実施できるのではないかという意見をいただいた。

グローバルな面での活動と、ローカルな身近にできることからできる活動に分けて活発な意見交換が行われた。



パネラーの意見に聴き入る参加者

(環境安全保健機構)

医学部附属病院が全国で初めて「VRE(バイコマイシン耐性腸球菌)の疫学調査」を開始

京都市内の2病院で、抗生物質のほとんど効かないバイコマイシン耐性腸球菌(VRE)の保菌者が相次いで確認された問題で、医学部附属病院は京都府と京都市からの依頼を受けて、府内のすべての病院と老人介護福祉施設など計346箇所を対象に疫学調査を実施することとなった。これを受けて7月7日

(木)、病院や老人介護福祉施設の担当者を集め説明会が開かれた。

京都市内では、120人の感染が確認されているが、調査は感染の経路や広がりを解明するために、今後3年がかりで行われる。

(医学部附属病院)

宇治事業場安全衛生懇談会を開催

本学宇治事業場(化学研究所、エネルギー理工学研究所、生存圏研究所、防災研究所および宇治地区事務部)は、7月8日(金)に田中成明理事、大寫幸一郎環境安全保健機構長を迎え、宇治地区4研究所長、宇治事業場総括安全衛生管理者、宇治事業場衛生委員、衛生管理者、部局該当委員会委員等を交え、宇治事業場の安全衛生について懇談会を開催した。

懇談会では宇治地区所長会議世話所長である吉川潔エネルギー理工学研究所長の挨拶、引き続き田中理事の挨拶のあと、宇治事業場安全衛生体制の現状について堀井文敬総括安全衛生管理者から報告があ

り、続いて各研究所の衛生管理者より日頃の定期巡視等についての報告と要望があり、今後の宇治事業場の安全衛生について活発な意見交換がなされた。また、各所長より定期巡視業務等の労に対し、謝辞が述べられた。

懇談会終了後、田中理事、大寫機構長は本年度に



活発な意見交換が行われた懇談会

設置された安全衛生管理室や研究所の実験室などを視察され、宇治地区4研究所教職員懇親会にも参加された。

(化学研究所, エネルギー理工学研究所, 生存圏研究所, 防災研究所)

宇治地区教職員懇親会を開催

京都大学宇治地区の化学研究所, エネルギー理工学研究所, 生存圏研究所及び防災研究所の4研究所では, 研究所間の連携と教職員の交流を深めるため, 7月8日(金)に尾池和夫総長はじめ, 入倉孝次郎, 辻文三, 田中成明各副学長の参加を得て, 「宇治地区4研究所教職員懇親会」を開催した。

懇親会には客員外国人教員を含む約150名の教職員の参加があり, 最初に, 宇治地区部局長会議世話部部長の吉川 潔エネルギー理工学研究所長より挨拶



バイオリン演奏を披露する山嵯教授

があり, 宇治地区研究所長等の紹介があった。

続いて, 尾池総長および辻, 田中両副学長からの挨拶の後, 入倉副学長の乾杯発声により懇談がはじまり, 途中で吉田桂子氏のピアノ伴奏による山嵯鉄夫エネルギー理工学研究所教授のバイオリン演奏が行われ, 出席者は有意義な交流の時間を過ごした。

(化学研究所, エネルギー理工学研究所, 生存圏研究所, 防災研究所)

京都大学未来フォーラム(第16回)を開催

7月21日(木)に時計台記念館百周年記念ホールにおいて, 恒例となった未来フォーラムが開催された。16回目となる今回は, 本学文学部の卒業生で大阪府立中央図書館名誉館長・姫路文学館館長で本学名誉教授の上田 正昭氏に「日本の古代国家と東アジア-華夷の思想をめぐって-」をテーマにご講演いただいた。

上田先生は, まず日本の歴史を研究する場合には, 近隣諸国の歴史をも含めて研究することが大切であることを述べられた後, 古くから漢民族が持っている中国が中心で周りの国はその属国であるとする, いわゆる「華夷の思想」を日本の古代国家の支配者も持っており, その思想は現在の日本にも引き継がれていることを, 史実を挙げながら具体的に説

明された。その上で, 「国際」的には紛争の火種を抱えている現代社会も, 「民衆際」的には交流がうまくいっていることを説明され, 欧州のEUのように, 東ア



講演する上田名誉教授

ジアでも10年か20年後には, この「民衆際」の交流によって, 一つの地域連合として友好関係を保つようになることを望んでいると述べられた。

参加した約200名はメモをとりながら真剣に聴き入っていた。

「2005 Daiwa International Workshop on Financial Engineering」を開催

経済学研究科主催、大和証券グループ協賛、21世紀COEプログラム「先端経済分析のインターフェイス拠点の形成」共催で、7月21日(木)より4日間にわたり東京(大手町サンケイプラザ:7月21日・22日)および京都(芝蘭会館:7月25日・26日)において2005 Daiwa International Workshop on Financial Engineeringが開催された。海外から9名および国内から21名の著名な研究者を招き、金融工学に関連する分野に関して最先端の研究内容が発表された。参加者は延べ365人におよび、大学関係者のみならず、金融機関をはじめとする企業からも多くの方々の参加を得て活発な討論と産学の交流が展開され、



最先端の研究発表が行われた会場の様子
成功裡に終了した。

(大学院経済学研究科)

医学部附属病院が接遇マナー研修会を実施

医学部附属病院では、7月29日(金)に(株)ニチイ学館より講師を招き「よりよい患者サービスのために」と題した接遇マナー研修会を実施した。

当日は、日常の業務が終わった直後にもかかわらず事務職員、看護師、薬剤師、医師など約100人の参加者があった。

研修会では、接遇の基本として接遇はなぜ必要なのか、接遇マナーの心構え、トラブル対応の仕方についての3つの基本についての講話があり、特に患者のみなさまに選ばれる病院になるためには、瞬間的に患者さんの気心をつかむことが大切であることを強調された。

最後に、研修のおさらいとして、患者役と職員役になってロールプレイングをすることにより良い点、



多数の参加者があった接遇マナー研修会の様子
悪い点を確認することができた。

研修終了後「接遇マナーの自己チェック」シートを職員同士が採点しあうことにより、より一段上のサービス提供を目指した。

(医学部附属病院)

「第8回高校生のための化学—化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会—」を開催

化学研究所では7月30日(土)に、中高生を対象に化学の最前線を聞いて、見て、楽しんでいただく見学会を開催した。

午前中は玉尾皓平名誉教授(元化学研究所教授、理化学研究所フロンティア研究システム長)らが企画制作し文部科学省から配布されている「一家に一

枚周期表」についての講演会があった。玉尾名誉教授、横尾俊信教授、寺嶋孝仁教授が、周期表制作にいたるまでのエピソードや、各元素がもつ現代社会との密接なかかわりについて講演した。

午後からは全国から訪れた高校生や教員が、11の研究室が企画するテーマサイトに分かれて実験や見学に参加した。赤い粉末（含リン化合物）と硫黄にベンゼンを混ぜて加熱すると、宝石のような澄んだブルーになるという実験をはじめ、すりつぶしたブロッコリーに洗剤を注ぎDNAを取り出す実験、食品添加物などに使われているさまざまな有機化合物のにおいを実際に嗅いでみる実験など、参加者それぞれに思い出の残る体験ができたようであった。取り出したDNAや観察したオジギソウ、ほう砂と洗濯のりを混ぜて作ったスライム、化学物質で着色した6色の水と油など、実験の成果をおみやげに持って帰れるサイトもあった。



テーマサイトでオジギソウの実験を楽しむ高校生

「理科ばなれ」が危惧される昨今であるが、テレビ番組や雑誌などを中心に少しずつ「理科ブーム」到来の気配も感じさせる今日この頃。その影響か200名近い応募があり、「第8回 高校生のための化学」は、例年になく盛況を見せた。

（化学研究所）

「大学院生のための教育実践講座」を実施

高等教育研究開発推進センター第1部門は、学生部教務課の協力を得て、「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」を8月4日（木）に時計台記念館国際交流ホールにおいて実施した。この講座は、大学教員をめざす本学の大学院生を対象に、教員への自覚的自己形成にきっかけを与えることを意図して計画されたものである。他大学でTA研修が実施された例はあるが、このような院生研修は全国で初めての試みであり、教育面での社会貢献事業の一つとしての試みである。

当日は、尾池和夫総長の挨拶から始まり、ミニ講義、討論、ボディワークなど8つのセッションで、長丁場の密度の濃い研修が実施された。他大学からの参観者たちが見守るなか、参加した大学院生と臨時の参加者たちは、討論や意見交換に終始積極的に参加し、有意義な研修となった。

修了式では36名の院生に対して総長名の修了証が



大学教員をめざす大学院生向け講座の受講風景

授与された。また、この講座についての事後アンケートや大学院生を交えた検討会での評価がきわめて高かったことから、さらに内容を充実して来年度も実施する予定である。

（高等教育研究開発推進センター）

再生医科学研究所が三重県立伊勢高等学校のS P P事業に協力

再生医科学研究所では、平成15年度より高等学校からの研修の依頼を受け入れ、生命科学や再生医療等についての講義と研究設備の見学を実施している。今年度は文部科学省が推進するS P P（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）事業校に採択された三重県立伊勢高等学校から協力依頼を受けた。まず、S P P事業の一環として6月17日（金）に中辻憲夫所長が、皇學館大学講堂において全校生徒と教職員約1,000名を前にヒトES細胞と再生医療についての講義を行い、続いて7月21日（木）には、加藤功一助教授が同校を訪問し再生医療における工学についての出前授業を行った。

8月11日（木）に、京都大学オープンキャンパス見学にあわせて同校の生徒と引率教諭計10名が再生医科学研究所を訪問し、午後の3時間、講義と研究設備の見学を行った。

まず、中辻所長は、再生研の概要の説明に続いて、生徒の皆さんへ激励の言葉と研究者になるには英語を学ぶことが大事であると述べた。

そのあと、山中伸弥教授のヒトES細胞やクローンについての講義、堤 定美教授から再生医療につ



MRI装置の見学をする高校生

ながる工学のさまざまな研究開発についての講義が行われた。講義終了後の質疑応答ではたくさんの質問が出て予定の時間を大幅に超過した。

講義のあとの見学では2つの班に分かれて、3か所の研究設備（電子顕微鏡、MRI装置、細胞識別解析装置）を巡り、担当の教職員から説明を受けた。

暑いさなかの来訪であったが、生徒の皆さんは熱心に聞き入っていた。

（再生医科学研究所）

公開講座

法学研究科21世紀COEプログラム連続市民公開講座

1. 日 時：10月22日（土）13：00～16：00
2. 会 場：ホテルグランヴィア京都5階「古今の間」
3. 演 題 と 講 師：第4回連続市民公開講座『市民社会の法と倫理』
 『裁判員制度と市民』 法学研究科 教授 棚瀬 孝雄
 『生命科学と法・生命倫理——ひと、いのち、社会』 法学研究科 教授 位田 隆一
4. 司 会 者：法学研究科 教授 櫻田 嘉章
5. 参 加 費 用：無料・お飲物代として500円。
6. 定 員：先着100名
7. 申 込 方 法：下記のHPの申込書をメールかFAXまたは郵送でお送り下さい。
<http://lp21coe.law.kyoto-u.ac.jp/>
8. 申 込 締 切：10月20日（木）
9. 申 込 先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町
 京都大学大学院法学研究科COE事務局
 E-mail：lp21coe@peach.ocn.ne.jp FAX：075-724-6173
10. 問い合わせ先：lp21coe@peach.ocn.ne.jp（寺井）

農学研究科附属農場第9回公開講座

「農業と食料の未来—その2—」というテーマで以下のとおり第9回公開講座を開催しますので、お誘い合わせのうえ、多数ご来聴くださるようご案内申し上げます。

1. 日 時：11月3日（木）9：30～17：15
2. 場 所：農学研究科附属農場 本館 2階 講義室（高槻市八丁畷町12-1）
3. 演 題 と 講 師：挨拶 農学研究科 教授 山田 利昭
雑草も進化する—除草剤抵抗性雑草の話— 農学研究科 教授 富永 達
品種改良とバイオサイエンス 農学研究科 教授 谷坂 隆俊
農林水産業は物質・エネルギー資源問題にも貢献できる 農学研究科 教授 山田 利昭
4. 定 員：40名（応募者多数の場合は抽選となります。）
5. 参 加 費 用：無料
6. 応 募 方 法：往復葉書で下記の連絡先に住所、氏名、電話番号（昼間連絡可能なもの）、ファックス番号、男女の別、年齢等を記入のうえ、申し込んでください。なお、昼食は各自でご用意ください。
10月14日（金）応募締め切り（必着）。可否は10月21日（金）以後はがきで連絡します。
7. 問い合わせ先：京都大学大学院農学研究科附属農場事務室
〒569-0096 高槻市八丁畷町12-1
T E L：072-685-0134 F A X：072-683-1532
詳細は農学研究科附属農場ホームページをご覧ください。

お知らせ

総合博物館平成17年秋季企画展

「日本の動物はいつどこからきたのか—動物地理学の挑戦—」

海で囲まれた日本の動物たちはいつ？どこから？やってきたのでしょうか。また、日本だけに分布する動物が多いのはなぜでしょうか？こうした謎を解くために京都大学で行われている、貝、昆虫、魚、両生類、爬虫類から哺乳類までのいろいろな動物を対象とした動物地理学の研究を紹介します。カモノハシ、オオサンショウウオ、ビワコオオナマズ等の学術的に貴重な標本や、ニホンオオカミ（頭骨レプリカ）、エゾカワウソ、クニマス、ミナミトミヨなど絶滅した動物の珍しい標本も展示します。

1. 会 場：総合博物館第2企画展示室（南棟2階）
2. 期 間：平成17年9月28日（水）～平成18年1月22日（日）
3. 開 館 時 間：9：30～16：30（入館は16：00まで）
4. 休 館 日：月曜日・火曜日（平日・祝日にかかわらず）、年末・年始（12月28日～1月4日）
5. 入 館 料：一般400円、大・高校生300円、中・小学生200円（20名以上団体割引あり、70歳以上の方・身体障害者の方は無料）

企画展関連行事

展示解説

毎週土曜日 14：00～、15：00～

毎週日曜日 11：00～、14：00～、15：00～（各40分程度）

総合博物館企画展関連行事

第18回公開講座「日本の動物はいつどこからきたのか」

この公開講座では、過去1000万年くらいの間に起こった動物たちの地理的分布の変遷と進化について見ていきます。日本列島の地形変化、気候変動、日本列島と大陸間の陸橋の形成と崩壊、植生をはじめとする生息環境の変遷等、日本列島の多様な動物相を形作ってきたと考えられる様々な要因についても考察します。4人の講師が最新の研究成果を例にあげながら、わかりやすく講義をします。

1. 期 日：11月5日（土）「動物地理学の挑戦」 総合博物館 助 手 本川 雅治
 11月12日（土）「ケモノたちの来た道－ニホンザルを中心に－」 霊長類研究所 助教授 川本 芳
 11月19日（土）「両生類のたどった道を探る」 人間・環境学研究科 教 授 松井 正文
 11月26日（土）「日本列島の昆虫：種多様性の起源」 理学研究科 助教授 曾田 貞滋
2. 開 催 時 間：13：30～16：00
3. 会 場：京都大学総合博物館 2階セミナー室
4. 定 員：30名（応募者多数の場合は抽選）
5. 受 講 料：6,200円（全講義を通しての受講料です。受講決定通知後に受講料を振込願います。
 納められた受講料は返金できません。）
6. 申 込 方 法：官製はがき・電子メール・FAXでお申込下さい。
 （官製はがきでの申込）
 ①「公開講座申込」の旨 ②住所 ③電話番号 ④氏名（ふりがな） ⑤年齢
 ⑥職業を記入の上、下記宛先にお申込下さい。
 （電子メール・FAXでの申込）
 ①題名：「公開講座申込」上記②～⑥を記入の上、下記宛先に送信してください。
 ※申込は1人1通とし、複数の申込は無効とします。受講申込の受付採否は後日お知らせします。
7. 申 込 締 切：10月17日（月） ※ただし、定員に達しない場合、締切後も申込を受け付けます。
8. 申込・問い合わせ先：
 京都大学総合博物館
 〒606-8501 京都市左京区吉田本町
 T E L：075-753-3272 F A X：075-753-3277
 申込用電子メールアドレス koukai@inet.museum.kyoto-u.ac.jp
 詳細は総合博物館ホームページをご覧ください。
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>

宇治キャンパス公開2005 ―夢のある安全な未来を拓く最新科学―

総合展示

- 日 時：10月7日（金）13：00～16：30
 10月8日（土）9：30～16：30
 会 場：化学研究所 共同研究棟 1階

公開ラボ

日 時：10月7日（金）13：00～16：30
 10月8日（土）9：30～16：30
 会 場：宇治キャンパス内の各研究所・センター・研究科の施設および
 防災研究所宇治川オープンラボラトリー
 （防災研究所宇治川オープンラボラトリーは10月8日（土）10：00～16：30のみ。
 当日、宇治キャンパス－宇治川オープンラボラトリー間はシャトルバスをご利用ください。）
 備 考：公開の日時は、プログラムにより確認願います。

公開講演会

日 時：10月8日（土）10：00～12：00
 会 場：化学研究所 共同研究棟1階大セミナー室
 定 員：250名
 参 加 費：無料
 演題と講師：「天然ゴム：その過去と未来」 化学研究所 教 授 糴谷 信三
 「光の時代を拓く新量子放射源：自由電子レーザー」 エネルギー理工学研究所 教 授 山崎 鉄夫
 「ナタデココが光った」 生存圏研究所 教 授 矢野 浩之
 「木造建物は地震に弱いのか、強くできるか」 防災研究所 教 授 鈴木 祥之

化学研究所公開講演会

日 時：10月8日（土）13：30～14：40
 会 場：化学研究所 共同研究棟大セミナー室
 参 加 費：無料
 演題と講師：「化合物で生命を理解する」 化学研究所 教 授 上杉 志成
 「次世代電子デバイスに向けた機能性材料開発」 化学研究所 教 授 島川 祐一

生存圏研究所公開講演会

日 時：10月8日（土）13：10～16：40
 会 場：生存圏研究所 木質ホール3階大ホール
 参 加 費：無料
 演題と講師：「宇宙開発・宇宙科学と私たちの暮らし－元気の出る宇宙生存圏開発－」 生存圏研究所 所長・教授 松本 紘
 「人工衛星から見る私たちの生存圏」 生存圏研究所 教 授 塩谷 雅人
 「シロアリと生存圏科学－シロアリは地球を救うか？－」 生存圏研究所 助教授 吉村 剛
 「わが国と中国における木の文化を較べる」 生存圏研究所 教 授 伊東 隆夫

樹木観察会・材鑑調査室見学会

日 時：10月7日（金）13：00～
 集 合 場 所：宇治キャンパス公開受付（雨天中止）

主 催 京都大学宇治キャンパス公開2005実行委員会

問い合わせ先 京都大学宇治地区事務部研究協力課研究支援掛

E-mail：kokai@uji.kyoto-u.ac.jp TEL：0774－38－3352 FAX：0774－38－3369

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.uji.kyoto-u.ac.jp/open-campus/2005.html>

第4回アトムサイエンスフェア

原子炉実験所では、下記のとおり「アトムサイエンスフェア」を開催します。
参加ご希望の方は、事前にお申し込みください。

1. 日 時：10月23日（日）13：30～
2. 場 所：原子炉実験所 事務棟会議室・図書棟会議室
3. 対 象：小学生～一般
4. 参 加 費：無料
5. 内 容：実験教室A：「放射線を見る道具を作る」 13：30～15：00
 実験教室B：「放射線をはかる」 13：30～15：00
 実験教室C：「わくわく面白実験」 13：30～15：00
 講 演 会：「巨大地震が関西を襲うーその時、身を守るためにー」
 講師：釜江克宏 教授 15：10～16：00
 施 設 見 学：実験教室A・B・Cの終了後（15：00～）と、講演会の終了後（16：00～）に
 希望者を対象に行います。
6. 照 会 先：原子炉実験所総務課総務掛 TEL：0724-51-2310
 お申し込み方法等の詳細は、原子炉実験所ホームページをご覧ください。
 <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/atoms/>

生態学研究センターオープンキャンパス

生態学研究センターでは、本学大学院生（修士または博士課程）として、生態学研究センターにおいて生態学の研究を志望される方を対象に、以下の日程でオープンキャンパスを開催します。当日は研究内容についての紹介、研究施設の見学会などを行います。関心のある方は、ぜひご参加ください。

1. 日 時：11月5日（土） 13：00～
2. 場 所：生態学研究センター（滋賀県大津市平野2丁目509-3）
3. 内 容：研究内容説明会 13：00～14：50 第2講義室
 研究施設巡回 15：00～16：20
 研究室訪問 16：20～
4. 参 加 費 用：無料
5. 申 込 方 法：氏名・所属・学年・住所・電話番号・メールアドレス、(あれば希望分野)を書いて、FAX、メール、はがきのいずれかで、下記住所、京都大学生態学研究センター 川田まで。
 申込先メールアドレスはオープンキャンパスホームページを参照してください。
 <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/graduate/op.html>
6. 申 込 締 切：10月21日（金）
7. 問い合わせ先：〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3 生態学研究センター 山村則男
 TEL：077-549-8257 FAX：077-549-8257

編集後記

地球規模で自然災害が猛威をふるっています。いつ我が身のことになるかもしれません。「備えあれば憂いなし」で事前の防災の準備が大切であることを痛感しているのは私だけではないと思います。ふと、本学の基本理念の「地球社会の調和ある共存に貢献する」が脳裏に浮かびました。「知」がこの危機に貢献して、安心・安全な地球社会となることを祈っています。